

行政視察報告書

視察報告者 倉掛 賢裕

【視察期間】 令和元年 10 月 29 日～令和元年 10 月 30 日

【視察日】 令和元年 10 月 29 日

【視察先】 熊本県熊本市

【調査事項】 熊本市西部環境工場について

【調査概要及び所感】

熊本市では、旧西部環境工場(昭和 61 年竣工)の老朽化に伴い、新たに可燃性の一般廃棄物を安全、安定的、経済的かつ衛生的に処理する一般廃棄物処理施設として新西部環境工場の施設整備・運営事業を実施。PFI 法に準じて公設民営方式(DBO)方式を採用している。

新西部環境工場は旧西部環境工場の隣接地に建設され、2つのストーカ炉で1日あたり280tの廃棄物を処理する。平成24年から約4年かけて整備され、JFEエンジニアリング(株)九州支店を代表とするグループに設計・施行・管理運営を一括して委託する公設民営(DBO)方式により、20年契約で運営されている。施設の使用期間は35年間を予定しており、契約期間後も利用する予定。

工事請負契約は約117億円、運営業務委託契約、飛灰処理委託契約、飛灰運搬業務委託は20年契約で、それぞれ約40億円、約12億円、約1億円となっている。

民間事業者の選定にあたっては、循環型社会づくりの柱となるよう環境への配慮、環境学習の場となり、地域に貢献できることを重視して選定。

旧施設と比較して建物で10m、煙突では16m高さを抑え、水の流れを取り入れた空間デザインや壁面緑化により環境啓発施設としてのイメージを演出することで周辺との調和を図り、焼却熱を最大限に利用することができる最新燃焼技術や水循環システム導入による節水効果、発電を最大化することによりCO₂の大幅削減をするなど最新の環境技術を取り入れている。また、洪水や地震に強い建屋構造で災害用品の備蓄、管理棟大会議室の災害時利用など、防災拠点施設としての機能を持ち、さらには太陽光発電やマイクロ水力発電などの環境啓発設備と合わせ、環境、エネルギー、水の先進技術を総合的に体験できる多彩な環境学習機能施設となっており、小学生の社会科見学にも利用されている。

実際、熊本地震の際には避難所として使用され、最大で350名もの市民が約2ヶ月もの間利用したそうで、地域の安心、安全に貢献している。

近隣にはこちらの熱を利用した温浴施設を備えた地域交流センターも整備されており、地元特産物の販売コーナーもあり、地域のコミュニティの場となっていて、年間で約12万4,000人の方が利用しており、そのうちの約4万人は環境センターに隣接する3つの町内からの利用であった。

本市でも、新しい一般廃棄物処理施設の建設が検討されている段階であり、周辺住民や環境へ配慮してエネルギーの最大利用ができる施設の整備をしっかりと進めていかなければならないと再認識した。

廃棄物を処理することで、市民の新たな利益と環境改善につながるリサイクルエネルギー学習センターになるよう、注視していきたいと思う。

熊本市ではDBO方式で各種業務を委託している中で、主灰事業は組み合わせられていなかったが、今となってはそれも組み合わせでの契約にした方がさらに効果的だったことをうかがうことができた。これも本市の大きな参考としたい。

【視察日】 令和元年 10 月 30 日

【視察先】 福岡県北九州市

【調査事項】 小倉城周辺魅力向上事業基本計画について

【調査概要及び所感】

北九州市では、小倉城周辺エリアの持つ歴史的、文化的なイメージを生かした整備、にぎわいづくりイベントなどを行い、集客力や回遊性のある「誰もが一度はそこを訪れてみたい」と思う観光・文化の名所とすることで、次世代に引き継げる市民が誇りを持ってあたたかく来訪者を迎え入れるホスピタリティ溢れる土壌づくりを行っている。

小倉城周辺エリアは、歴史資源、文学資源、小倉祇園太鼓や小倉織など今日まで脈々と受け継がれてきた伝統文化ゆかりの地でありながら、個々の資源が持つ可能性や魅力を効果的にPRできていないこと、人の流れが各施設で完結してしまい、エリア全体での集客や魅力発信につながっていないことなどの課題があった。

また、それらを対外的にアピールするシビックプライドの醸成も求められることから、『北九州・小倉ならではの歴史的・文化的な資源を活用した集客力や回遊性のある観光・文化の名所づくり』をテーマに、「北九州・小倉の歴史、文化資源を活かした新たな魅力づくり」「来訪者の回遊性・にぎわいや交流が生まれる空間づくり」「北九州・小倉ならではのおもてなし・シビックプライドの醸成」の3つの事業の方向性を定め、それらに合わせ「歴史ゾーン」「文学ゾーン」「市民の憩いと交流ゾーン」3つのゾーンにエリアを設定している。

3つの方向性の柱のもと、7つの取り組みを実施し、その主なものは小倉城・小倉城庭園の展示のリニューアル、城内の樹木等の再整備、和風オープンカフェの整備、クルーズ船の入港に対応するための100台規模での大型バス駐車スペース整備など、総事業費で約10億円の大規模事業を行っており、その結果、本年度途中での来場者数はリニューアル前の平成29年度の19万人に対し、約130%(そのうち外国からの来場者は約30%)となっている。

今後は市民の憩いと交流の観点からも、市民のリピート率の向上が課題となる。市民のリピート率が上がることで市民がこのエリアに誇りを持ち、発信していくことで集客につ

ながら、さらに次世代に歴史と文化とシビックプライドを引き継げるようになっていくのではないだろうか。

本市においても、大友氏館の復元、ラグビーワールドカップのレガシーなど、小倉城周辺エリアと似た環境はある。また、足場で作った府内城天守閣のライトアップも今後は復元などの議論が出るのだろうと思われる。

今回の視察で、天守閣の再生には復元と復興があることを聞いた。復興とは必ずしも元のままではなく、小倉城も復興天守であり、大坂城なども復興天守であるとのこと。府内城の再生を検討する際には、歴史的資源、文化的資源、観光的資源の観点と、地理的要素や用途としての目的も含め、復興天守も1つの案として検討していくことが望ましいのだろうと感じた。